

ソースはどこ？—学術誌の電子化がもたらす未来

調 麻佐志

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院

最古の学術誌 2 誌が何年に刊行されたかが判明しているにもかかわらず、それより 300 年以上新しい最初の電子ジャーナルやオープン・アクセス・ジャーナル (OA 誌) がいつ世に現れたのかはよくわかっていない。とはいえ、少なくとも 80 年代半ばには最初期の電子ジャーナルが刊行されている (Keefer 2001)。

その後、90 年代になってインターネットの普及とともに急激に学術誌の電子化／オンライン化が進んだ。現在、国際的な学術誌の (ほぼ) すべてが電子化されている。

多少古い調査結果ながら 2013 年には学術文献データベース (WoS) に収録されたタイトルのうちの 12% 程度が OA 誌であった (Fuchs & Sandoval 2013)。掲載誌がオープン・アクセス (OA) でなくとも掲載論文が OA な事例も多く (上田 2015)、また EU 等でみられるように公的研究資金をえた研究成果の公開を義務化する動きが活発化しており、今後論文単位の「オープン・アクセス」化 (プレプリント・サーバーおよび機関レポジトリから問題のある Sci-Hub のような仕組み経由までを含む) がますます進むと予想される。このような電子化の半ば必然的な帰結として進む OA 化のおかげ、とりわけ非専門家にとって、学術論文の利用可能性が高まり、その「証拠」としての重要性も増してきた。

紙媒体に印刷された学術誌とくらべて、電子化された学術誌には、たとえば以下のような特徴がある。①低発行コスト・流通コスト、②文量への制約不要、③内容の更新可能、④マルチモーダルな表現可能、⑤検索可能、⑥インターネット上の他の文章と (相互に) リンクが可能。

従来、国内新聞で学術論文を参照した記事が掲載される際、酷いときには著者名すら記載されず、米国専門誌で発表などとだけ書かれたケースが普通に見られた。しかし、今春、毎日新聞は Web 上の科学記事で言及した学術論文へのリンク付けを行い、ソースを明らかにするように姿勢を変えた。

新聞記事に限らず、誤解に基づくものも含めて、学術論文が「証拠」あるいは「根拠」として重視される機会が増えている。科学記事は言うまでもなく、ネット上の論争や名誉毀損の裁判から政策の現場まで科学的な根拠なしに済ますことが難しくなっており、学術論文がその主な「ソース」である。学術誌が電子化され、ネットでの検索の対象となる以前には考えられなかった状況である。

学術論文を読みこなすことは容易ではなく、「素人」が理解するには限界がある。それでも、「素人」がネット上の論文にアクセスし利用することが増え、またソースとして学術論文が要求されるような電子化が進んだ世界にどのようなことが起きたか、またこれから起こるのだろうか。科学 (あるいは研究) および科学者の信頼性、成果の質保証と評価、学術と政治の関係の観点から検討するとともに、具体的な事例も交えて何が起きたか振り返りたい。